『吾輩は猫である』中篇自序

夏目漱石

「猫」の稿を継(つ)ぐときには、大抵初篇と同じ程な枚数に筆を擱(お)いて、上下二冊の単行本にしようと思って居た。所が何かの都合で頁(ページ)が少し延びたので書肆(しょし)は上中下にしたいと申出た。其辺は営業上の関係で、著作者たる余には何等の影響もない事だから、それも善(よ)かろうと同意して、先(ま)ず是丈(これだけ)を中篇として発行する事にした。

　そこで序をかくときに不図(ふと)思い出した事がある。余が倫敦(ロンドン)に居るとき、忘友子規の病を慰める為め、当時彼地(かのち)の模様をかいて遙々(はるばる)と二三回長い消息をした。無聊(ぶりょう)に苦んで居た子規は余の書翰(しょかん)を見て大に面白かっ

たと見えて、多忙の所を気の毒だが、もう一度何か書いてくれまいかとの依頼をよこした。此時子規は余程（よほど）の重体で、手紙の文句も頗（すこぶ）る悲酸（ひさん）であったから、情誼（じょうぎ）上何か認（したた）めてやりたいとは思ったものの、こちらも遊んで居る身分ではなし、そう面白い種をあさってあるく様な閑日月もなかったから、つい其儘（そのまま）にして居るうちに子規は死んで仕舞（しま）った。

　筐底（きょうてい）から出して見ると、其手紙にはこうある。

　僕ハモーダメニナッテシマッタ、毎日訳モナク号泣シテ居ルヨウナ次第ダ、ソレダカラ新聞雑誌へモ少シモ書カヌ。手紙ハ一切廃止。ソレダカラ御無沙汰シテ

マス。今夜ハフト思イツイテ特別ニ手紙ヲカク。イツカヨコシテクレタ君ノ手紙ハ非常ニ面白カッタ。近来僕ヲ喜バセタ者ノ随一ダ。僕ガ昔カラ西洋ヲ見タガッテ居タノハ君モ知ッテルダロー。夫(それ)ガ病人ニナッテシマッタノダカラ残念デタマラナイノダガ、君ノ手紙ヲ見テ西洋へ往(いっ)タヨウナ気ニナッテ愉快デタマラヌ。若(も)シ書ケルナラ僕ノ目ノ明イテル内ニ今一便ヨコシテクレヌカ(無理ナ注文ダガ)

画ハガキモ慥(たしか)ニ受取タ。倫敦(ロンドン)ノ焼芋(やきいも)ノ味ハドンナカ聞キタイ。

不折ハ今巴里(パリ)ニ居テコーランノ処へ通ッテ居ルソウ

ジャナイカ。君ニ逢（お）ウタラ鰹節一本贈ルナドトイウテ居タガ、モーソンナ者ハ食ウテシマッテアルマイ。

虚子ハ男子ヲ挙ゲタ。僕ガ年尾トツケテヤッタ。

錬郷死ニ非風死ニ皆僕ヨリ先ニ死ンデシマッタ。

僕ハ迚（とて）モ君ニ再会スルヿ（こと）ハ出来ヌト思ウ。万一出来タトシテモ其時ハ話モ出来ナクナッテルデアロー。実ハ僕ハ生キテイルノガ苦シイノダ。僕ノ日記ニハ「古白曰来」ノ四字ガ特書シテアル処ガアル。

書キタイヿ（こと）ハ多イガ苦シイカラ許シテクレ玉エ。

明治卅四年十一月六日灯下ニ書ス

東京　子規　拝

倫敦（ロンドン）ニテ

漱石　兄

此手紙は美濃紙へ行書でかいてある。筆力は垂死の病人とは思えぬ程慥（たしか）である。余は此手紙を見る度（たび）に何だか故人に対して済まぬ事をしたような気がする。書きたいことは多いが苦しいから許してくれ玉えとある文句は露佯（つゆいつわ）りのない所だが、書きたいことは書きたいが、忙がしいから許してくれ玉えと云う余の返事には少々の遁辞（とんじ）が這入（はい）って居る。憐（あわ）れなる子規は余が通信を待ち暮らしつつ、待ち暮らした甲斐（かい）もなく呼吸（いき）を引き取ったのである。

子規はにくい男である。嘗（かつ）て墨汁一滴か何かの中に、独乙（ドイツ）では姉崎や、藤代が独乙語で演説をして大喝采（だいかっさい）を博しているのに漱石は倫敦（ロンドン）の片田舎（かたいなか）の下宿に燻（くすぶ）って、婆さんからいじめられていると云う様な事をかいた。こんな事をかくときは、にくい男だが、書きたいことは多いが、苦しいから許してくれ玉え抔（など）と云われると気の毒で堪（たま）らない。余は子規に対して此気の毒を晴らさないうちに、とうとう彼を殺して仕舞（しま）った。

子規がいきて居たら「猫」を読んで何と云うか知らぬ。或（あるい）は倫敦消息は読みたいが「猫」は御免（ごめん）だと逃げるかも分らない。然し「猫」は余を有名にした第一の

作物である。有名になった事が左程（さほど）の自慢にはならぬが、墨汁一滴のうちで暗（あん）に余を激励した故人に対しては、此作を地下に寄するのが或は恰好（かっこう）かも知れぬ。季子は剣を墓にかけて、故人の意に酬（むく）いたと云うから、余も亦（また）「猫」を碣頭（けっとう）に献じて、往日の気の毒を五年後の今日に晴そうと思う。

子規は死ぬ時に糸瓜（へちま）の句を咏（よ）んで死んだ男である。だから世人は子規の忌日を糸瓜忌と称え、子規自身の事を糸瓜仏となづけて居る。余が十余年前子規と共に俳句を作った時に

長けれど何の糸瓜とさがりけり

というふらふらと得た事がある。糸瓜に縁があるから「猫」と共に併(あわ)せて地下に捧げる。

　どつしりと尻を据(す)えたる南瓜(かぼちゃ)かな

と云う句も其頃作ったようだ。同じく瓜と云う字のつく所を以て見ると南瓜も糸瓜も親類の間柄(あいだがら)だろう。親類付合のある南瓜の句を糸瓜仏に奉納するのに別段の不思議もない筈(はず)だ。そこで序(ついで)ながら此句も霊前に献上する事にした。子規は今どこにどうして居るか知らない。恐らくは据(す)えるべき尻がないので落付をとる機械に窮しているだろう。余は未(いま)だに尻を持って居る。どうせ持っているものだから、先(ま)ずどっしりと、おろ

して、そう人の思わく通り急には動かない積(つも)りである。然し子規は又例の如く尻持たぬわが身につまされて、遠くから余の事を心配するといけないから、亡友に安心をさせる為め一言断って置く。

明治三十九年十月

底本：「筑摩全集類聚版　夏目漱石全集第十巻」筑摩書房
　　　１９７２（昭和47）年1月10日第1刷発行
入力：Nana ohbe
校正：米田進
２００２年５月10日作成
２００７年７月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。